

# 複数公園の一体的再整備事業の プロセスに関する実践的研究 -長崎市横尾地区の9街区公園を対象として-

中村 太一<sup>1</sup>・石橋 知也<sup>2</sup>

<sup>1</sup>正会員 中央コンサルタンツ（株）（〒812-0039 福岡市博多区冷泉町 2-1）

E-mail: taichi-nakamura@chuoh-c.co.jp

<sup>2</sup>正会員 長崎大学大学院准教授 工学研究科（〒852-8521 長崎県長崎市文教町 1-14）

E-mail: itomoya@nagasaki-u.ac.jp

自治体は地区全体で公園を再整備し、各々の機能を特化・相互補完する取り組みを進めている。長崎市横尾地区では、施設の老朽化や少子高齢化により、利用者ニーズに施設の機能が適さなくなっている。市は同地区の9公園の機能や設備の再整備を計画している。本研究では、長崎市横尾地区公園再整備計画事業を対象に、参与観察により、再整備案の策定に係るワークショップや協議等のプロセスを詳述し、複数公園を一体的に再整備する観点での議論の要点や、課題等を抽出した。その結果、ワークショップを開催するうえでの緻密な準備の必要性、公園づくりに対する参加者の意識変容、公園全体に関する議論の工夫の重要性、一体的検討による各役割の把握のしやすさ、を指摘した。

**キーワード:**長崎市, 街区公園, 一体的再整備, プロセス,

## 1. はじめに

### (1) 背景と目的

供用開始から30年以上経過する都市公園が2031年度には約7割を占める見込みである<sup>注1)</sup>。そのため、全国の大多数の都市公園において、大幅な更新作業が必要とされている。しかし、我が国の人口は2012年度以降、減少を続けていることから、使われないあるいは維持管理がなされない公共空間が増加している<sup>注2)</sup>。これらを受けて、国土交通省は2016年度に都市機能の向上に着目した都市公園ストック再編の推進などの対応策を打ち出した。これに伴い、幾つかの地方自治体において、公園再整備の動きが見られる。例えば、北九州市では、一つの小学校区内に存在する供用開始から30年以上が経過した街区公園を対象として、一体的な再整備事業が実施されている<sup>注3)</sup>。また、長崎市では、同市の横尾地区にて、前述した北九州市のような公園再整備の事業化に取り組んでいる。筆者は2022年度から継続して、本事業に携わっている。これらのことから、複数公園を一体的に再整備することの重要性が高まってきていると言える。

以上より本研究では、長崎市横尾地区都市公園機能再

編事業（以下、本事業）を対象とし、参与観察により、本事業策定に係るワークショップ（以下、WS）や協議などのプロセスを詳述し、複数公園を一体的に再整備する観点での議論の要点や課題等を抽出することを目的とする。

### (2) 既往研究と本研究の位置づけ

まず、住民参加型の合意形成に関する既往研究について述べる。萩尾らは長崎県対馬市厳原において、歴史的石塀の保全を目指した住民参加型街路再整備事業のプロセスを詳述し、合意形成ならびに歴史的地域資源の保全を巡る課題について考察した<sup>1)</sup>。柴田らは福岡市内の小学校学内の広場を対象とし、児童参加による景観設計も事例を報告したうえで、参加プロセスがもつ効用について考察し、対象広場での実体験を重視した参加プロセスによって児童たちの意味付けを促し、より参加の記憶や愛着を強める効果が発揮されることを明らかにした<sup>2)</sup>。

次に、WSにおける合意形成手法について調査した研究について述べる。三宅らは、東日本大震災の復興むらづくりの事例として野田村都市公園事業を取り上げ、小中高と協力して取り組んだプロセスとそれを実現可能と

したむらづくりの体制，成果を整理し，継続的な学校参加にむけた課題を明らかにした<sup>3)</sup>。

次に，都市公園の機能分担や隣接パターンに関する研究について述べる。吉田らは 2500m<sup>2</sup> 以下の街区公園及び児童公園の機能分担整備に着目し，公園を利用する公園機能・施設と選好性の把握や公園選考と地域条件に沿う整備の意思決定支援ツールの提案などをおこなった<sup>4)</sup>。また，安藤らは札幌市の小学校と都市公園が隣接して配置されている状況に焦点を当て，両者の隣接パターン傾向を把握するとともに，この傾向が都市公園を利用する学校関係者や地域住民にどのような影響を与えるのかについて分析した<sup>5)</sup>。

最後に，都市公園の利用実態を調査した研究について述べる。小玉らは松戸市を対象とし，地区公園と未利用土地活用型オープンスペースである「子どもの遊び場」の利用実態を調査し，都市におけるオープンスペース利用の活性化には，未利用土地活用型オープンスペースと地区公園では不可能な利用を可能にするルールづくりが必要であることなどを明らかにした<sup>6)</sup>。

本研究は以上の流れに位置するものの，地区全体において一体的な公園再整備事業を対象として，WS 運営や事前協議における課題を抽出する点，調査により得られた知見を他都市へ還元を見据える点の以上 2 点がこれまでの研究とは一線を画すものといえる。

### (3) 本研究の構成・研究方法

本研究は全 5 章で構成されている。1，2 章では，背景と目的，既往研究，国土交通省の動向及び他都市事例などについて言及する。3，4 章では，本事業の概要，主である地区 WS のプロセスを詳述する。これらの議論を踏まえ，5 章にて総合的考察をおこなう。

本研究は以下の手順で進める。1) 本事業の地区 WS 運営に関わる全ての協議や WS 等に参画し，議事録を記入する。2) 各議事録より，議論のテーマ，WS の成果物，決定事項及びそれにつながる本事業に関わる関係者（以下，事務局と呼ぶ）の言動，ワークや協議の改善・工夫に関する関係者間での言動，WS やアンケート等で得られた参加者の意見を抽出する。最後に，プロセス全体を振り返り考察する。

## 2. 都市公園再編事業の我が国における動向

### (1) 都市公園再編事業の我が国における動向

緑とオープンスペースは，都市住民の憩いの場，多様なレクリエーションの場，災害発生時の避難地や避難路，地域固有の美しい風景・景観の形成等に大きな役割を果たしてきた。特に，緑とオープンスペースの中核をなす

都市公園については，これまで約 12 万 ha が全国に整備され，一人当たり都市公園等面積が 10m<sup>2</sup>/人に達するなど一定のストックが形成され，様々な効用を発揮している。一方，我が国は人口減少社会に突入し，大都市への集中による地方都市からの若年層の流出等により地域的な人口の偏在も加速している。高齢化率は，2013 年度に 25% を超え，今後も更に進行すると見込まれている。加えて，都市公園，下水道等をはじめとした社会資本の整備が進む一方，我が国の財政状況は 1990 年以降急速に悪化し，厳しい財政制約の中での老朽化した施設の適切なメンテナンスなどが課題となっている。また，緑とオープンスペースの確保が進捗する一方で，地方公共団体の職員数や維持管理費は減少しており，施設の老朽化に起因する事故や時代の変化や多様化するニーズに対してポテンシャルを活かしきれていない都市公園も散見される<sup>注 4)</sup>。これらの背景を踏まえて，国土交通省は，今後の緑とオープンスペース政策として，1) 緑とオープンスペースによる都市のリノベーションの推進，2) より柔軟に都市公園を使いこなすためのプランニングとマネジメントの強化，3) 民との効果的な連携のための仕組みの充実の 3 つの戦略を重点的に推進した。1) では，緑の基本計画等による戦略的な都市再構築の推進，都市公園の配置と機能の再編等による都市の活性化などを掲げた。2) では，都市経営の視点からの都市公園マネジメント，地域の特性やニーズに応じた都市公園の整備などを推進した。3) では，緑とオープンスペースの利活用を活性化するための体制の構築などを挙げた。本事業は上記項目に該当しており，国土交通省が 2010 年度より制定する社会資本整備総合交付金の都市公園ストック再編事業に準ずる<sup>注 5)</sup>。

### (2) 他都市の都市公園再編の事例

北九州市では，2008 年度より独自に複数公園を一体的に整備する「地域に役立つ公園づくり」事業を実施している<sup>3)</sup>。同市内の小学校区では，周辺に住む子どもの減少や施設などの老朽化により，地域のニーズが合わなくなり，使われない公園も確認されている。同市はそれらの状況を改善し，これまで以上に公園が利用されるようにすることを目指した。同市が地域の「まちづくり協議会」等で WS や現地調査を介して地域の要望を聞き，老朽化して使いにくくなった遊具の改修や，地域活動に必要な機能の付加，公園を含むソフトの策定を実施していることを把握した。また，本事業では，新たな用地買収は実施しないことや，整備してから年数が 30 年以上経過していない公園の全面改修は実施しないなどの整備の前提条件が定められていることも明らかとなった。図 1 では，WS で意見を集約して出来た整備案を示している。図のように公園の撤去するべき遊具の記載や，公園間の



図1 北九州市高須地区事例

遊具の移設などが看取された。以上の事例を、本事業のWSのワークや成果物において参考資料として活用することとなった。

### 3. 横尾地区公園再整備事業の概要

#### (1) 長崎市横尾地区の位置的概要

本事業の対象地である横尾は、長崎市横尾1丁目から5丁目にかかるまちである。2001年度の人口は7030名だったのに対し、2021年度の人口5330名となっており、人口が減少している<sup>注6)</sup>。また、同地区には、多くの戸建て住宅に加えて、滑石公務員アパートや市営住宅などが点在することから、長崎市のベッドタウンともいえる。同地区には、小学校、中学校が一つずつ存在している。地域は小中学校と連携して、横尾まつり（地域の祭り）や横尾だんじり（伝統行事）などを執り行っている。このことから、教育施設と地域の関わりは強いといえる。

#### (2) 対象とする9公園の概況と長崎市の動向

対象とする公園は、猿田、山の木、上横尾緑地、築廻、秋寄、滑石3丁目中、滑石3丁目下、横尾元村、横尾とする。9公園の位置と写真を載せたものを図2で示す。いずれも街区公園であり横尾小学校区にすべて位置している。全公園において、併用開始から30年以上が経過しており、秋寄を除いて、遊具や腰掛などの設備に老朽化を確認した。

横尾地区の公園では、施設の老朽化や少子高齢化により、利用者のニーズに施設の機能がうまく合わなくなりつつある。特に同地区では、よく使われる公園と使われない公園がみられる。そこで同地区を中心とした市民が公園を利用しやすくするため、長崎市は同地区の9公園の機能や設備をリニューアルすることを計画し、現在、公園のリニューアルのための市民WSが開催されている。



図2 横尾地区ベースマップ

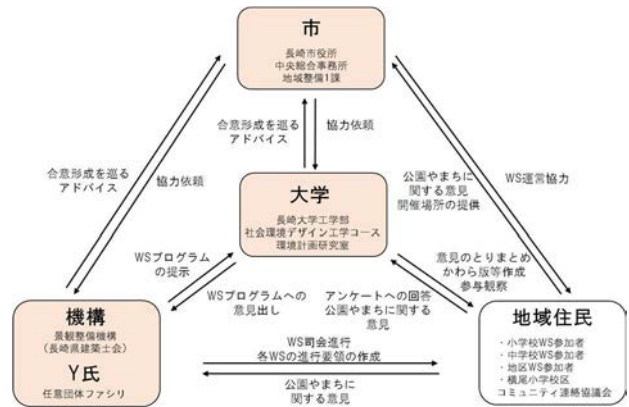


図3 関係主体図

#### (3) 関係主体の体制・役割

本事業の関係主体を図3に示す。本事業は、長崎市中央総合事務所地域整備1課（以下、市）、任意団体ファシリ Y氏（以下、Y氏）NPO法人景観整備機構（以下、機構）、長崎大学環境計画研究室（以下、大学）、地域住民で実施した。なお、市、機構、Y氏、大学からなる組織を事務局と呼ぶ。

### 4. 横尾地区都市公園機能再編事業プロセス

本事業では、全5回の地区WSに加えて、地区WS-3への情報共有を目的とした全5回の小学校WS、全2回の中学校WS、計12回のWSが開催された。地区WSの参加者数は各回概ね30名であった。協議のプロセスについては地区WSを表1に、小中学校WSのみを表2に示す。ここでは、地区WSのプロセスについて表1を用いて時系列で詳述する。

#### (1) 第1回地区WSに係る協議の過程

##### a) 事前協議

2月8日では、市から2022年度から24年度までの本



### c) WS

まず、横尾小学校区コミュニティ連絡協議会からWSの目的や、地区の現状と将来像、住民の地区運営に関する取組みなどの説明がなされた。次に、市から公園の役割などの説明がなされた。その後、参加者間で各班に振り分けられた3公園の「良い点」「気になる点」「改善点」について話し合った。結果、秋寄や築廻などに意見が集中し、横尾元村、滑石3丁目下、中では、「知らない」「わからない」の意見が数件見られた。

### d) 振り返り

WS内のアンケートと進行について振り返った。まず、年代別参加者については、10代以下は小学校WS、中学校WS、30~40代は小学校PTAの保護者アンケートで補完できるため、ほぼ全ての世代で意見を収集することが出来た。次に、進行については問題なく進み、一定の成果物を得ることが出来た。一方で、参加者から「発表する際に、何を発表してよいかわからない」と複数指摘があった。これを受け、グループファシリテーターは今後のWSにおいて、どこを発表すべきか参加者へアシストをすることとなった。

## (2) 第2回地区WSに係る協議の過程

### a) 事前協議

6月4日の現地調査では、大学の関係者3名で9公園を観察した。目的は設備の劣化状況や植生の確認など各公園の理解度を深めることであった。調査結果について秋寄や滑石3丁目中を除いて、遊具やベンチの劣化を確認した。また、横尾、秋寄などでは、花壇に花が植えられており、地域住民が手入れをしていることが分かった。今後の整備案の想定として、「猿田の川が近くを流れている利点を生かして、川と公園の一体的整備」や「山の木の入り口を増設、あるいは遊具を移設・撤去する等して動線の整理」などが挙げられた。

7月22日の現地調査では、グループファシリテーターを担当する大学関係者を対象として実施した。目的は、担当する公園について理解し、ワークを円滑に進めるためであった。前回同様に設備の劣化状況などを観察し、各公園の課題や予想される整備方針などを記録した。

7月12日では、ワーク内容、公園リニューアル計画全体のコンセプトを設定するための意見出しについて検討した。出された意見では、市やY氏からは「どのようにコンセプトを立てていくのか」「小学校中学校で出される各公園の役割をWSでどのように扱うのか」などの意見がだされた。また、大学はコンセプト作成の意味や重要性を参加者に理解してもらう必要があることを強調した。以上を踏まえ、WSでは、公園リニューアルの基本指針となる考え方についての議論を目指すこと、コンセプトに基づいて作られた他都市の公園再編事例を共有

し、コンセプト設定の重要性を伝えること等が決定した。

7月19日では、ワーク内容について議論した。Y氏から「公園の機能再編とリニューアルを行うにあたっての基本的指針が必要であり、これを作るためのキーワードや考え方を出す。この指針がこの公園整備とどのように関わるのかを明らかにする」とし、本WSの目的を示した。次にワーク内容について議論をおこなった。ワークの前半で、公園全体において「分野別の将来像」「将来実現のための取組み」「その他・全体に言えること」この3つの観点で意見出ししてもらう。その後ワークの後半で、意見をグループ分けしたうえで、コンセプトの仮案を作成する。これに対して、大学からは「コンセプトを直接作成することは難しい。事前に作成した「笑顔でつながる ALL 横尾」に記載された分野別の将来像ごとに意見を出すべき」とした。WSが新型コロナウイルス感染拡大を受けて7月から9月11日に延期となった。

7月29日では、進行要領の磨き上げとWSまでの取組みについて議論した。機構から、地域を巻き込んだ取組みとして、1)大人と小中学生を対象として、グループで公園巡り、意見交換会の実施、2)地域住民を対象とした他都市の事例紹介、3)小中学校WSのかわら版作成の3つの取組みを提案した。これに対する意見として、3)の案について、市からは「小中学生が頑張った姿を保護者の方々に共有する必要があるのではないか。この共有によって、保護者が公園再整備について知ってもらえるのではないか」とした。これを受けて、小中学校WSの報告冊子を作成することとなった。

### b) シミュレーション

8月9日では、内容を通した。挙げられた意見では、参加者役は「「分野別の将来像」について唐突に問われても何について意見出しすべきかわかりづらい」「「分野別の将来像」よりも「将来像実現のための取組み」の方が意見出しやすかった」とした。以上を踏まえ、更なる意見交換をすることとなった。また、グループファシリテーターはワークAにおいて参加者が意見を出しづらい場合、「笑顔でつながる ALL 横尾」の分野別の将来像、前回の成果物をまとめた冊子から意見例を持ち出し、円滑に進めることを心掛けることなどが決定した。

9月5日では、プログラム内容の調整を実施した。調整箇所について、「将来像実現のための取組み」では参加者が意味を理解しがたいため、「将来どんな公園にしたいですか」とした端的な質問をすることとなった。

### c) WS

Y氏から、前回の振り返りや本日の進め方などについて説明がおこなわれた。次に、参加者間で「将来どんな公園にしたいですか」の設問に対して意見を出し合った。出た意見として、「見通しがよく、安心安全な公園」や「子どもが遊べるように遊具を新しくする」などが見れ

た。また、「川など水を使った癒し、遊びを展開する」「世代別に公園の役割を振り分けるべき」といった公園ごとの役割分担に関する意見なども多数散見された。その後、大学はコンセプト案の意味や作成する際の要点や、他都市のコンセプト作成事例などを参加者に説明した。その内容や前半の意見を基に、参加者で横尾地区の公園全体のコンセプト仮案を考えた。コンセプト仮案については、「多世代で使える公園づくり」や「地域で見守り、育てる安心・安全な公園」など計 15 件出された。最後にワークにおいて検討した横尾地区全体における将来の公園の理想像とコンセプト仮案を参加者間で発表及び共有を実施した。発表では、「子どもからお年寄りまでがつながる」や「多世代交流」といった世代間のつながりを重視したもの、「子どもが遊べる」や「様々な世代に対応した遊具設備」など子どもの成長を重視した意見、「公園の役割を仕分けする」とした公園の機能分担に関する意見などが確認された。

#### d) 振り返り

9月21日では、アンケートで参加者から出された回答の共有がなされた。設問項目の「話し合ってみたいことは何か」において、参加者からは、「公園ごとの役割の違いについても話し合ってみたい」などの公園の機能分担に関する回答も見られた。これに対して、大学からは、「全5回のWSで終わるのではなく、参加者の機運を継続して高めるように、来年度以降も検討する機会を設けるべき」や「WS4, 5の中では、整備に関する項目だけでなく、地域のつながりの強化や維持管理の仕組みづくりなどを検討する機会が来年度以降にも必要」とし、継続して協議を実施することの重要性について確認した。

### (3) 第3回地区WSに係る協議の過程

#### a) 事前協議

9月21日では、プログラム案について検討した。Y氏は「今回はコンセプトの案及び公園リニューアル計画のたたき台を作成することを目標とする」とした。プログラム案検討では、大学は「住民から頂いた意見を全て鵜呑みにするべきではない。事務局間で各公園の整備案作成を念頭に置くべき」とし、公園リニューアル計画のたたき台に事務局の整備方針も追加することの重要性を示した。

9月27日の事前協議では、改編されたプログラム案、参加者のグループの分け方、ワークA, Bの詳細な内容、事務局作成のコンセプト案のたたき台について議論を実施した。変更点は、表2に示す通り小中学校WS結果報告をWS3にて実施する点と、当初ワークAで予定していたコンセプト案に対する意見出しを、振り返りの中で、コンセプト案たたき台を見せることの2点であった。ワークA, Bの詳細内容の検討では、市の「参加者が各担

当の公園について意見出しを実施する中で、もし、他の公園に意見したい場合はほかの班に意見出しする時間を設ける」とした。事務局作成のコンセプト案のたたき台については、Y氏からはWS2にて参加者が出したコンセプト仮案を基に、作成することを求めた。

10月5日では、コンセプト案のたたき台の再検討とリニューアル計画たたき台の確認、ワーク成果物の検討、アンケート内容の検討を実施した。大学から修正された5つのコンセプトが出された。これらについてY氏からは、「1つのコンセプトがほかの全コンセプトに対応している。そのため、コンセプトの差別化が必要」とし、コンセプトのレベルに差を与えることを提案した。これを受けて、1) 多世代で集える、楽しめる、健康になれる公園、2) 地域で見守る、育てる、安心・安全な公園、3) 自然の魅力に触れる憩いの公園、4) 管理しやすい、非日常にも対応できる公園、全体：9公園の各役割の整理ならびに横尾地区一体での公園の連携となった。

#### b) シミュレーション

10月12日では、前回検討したWSのプログラムを試行し、全体の進め方や説明方法・ワークにおける課題や意見等を抽出した。プログラムを変更するような大幅な変更意見はなかった。詳細な意見では、参加者役の市から「ワークA終盤では、方針や課題など複数の項目があるため、どこまで議論したのかが分かりにくいのではないか」との意見が出された。これを受けて、グループファシリテーターは話し終わった項目ごとにチェックを付け、議論の展開を明確にすることとなった。

#### c) WS

Y氏から小中学校WSの結果が説明された。小学生には「自分たちが使いたい理想の公園」について、中学生には「大人になっても使いたい公園」について検討した結果を共有した。次に、大学から各公園のリニューアル計画のたたき台の方針と課題、4つのコンセプトと1つの統括コンセプトが提示された。その後、ワーク前半において各公園の課題と方針のたたき台について意見を出



写真1 WSの様子

し合った。ここでは、方針、課題の変更に関する意見はあまり確認されなかった。また、項目ごとに貼られた付箋の数や赤線で強調されていることから、それぞれに重要度に差がみられることが確認された。ワーク後半では、4つのコンセプトと1つの統括コンセプトについて意見を出し合った。ここでは、コンセプト案への文字の過不足に関する意見が主に見られた。最後にワークにおいて検討した方針、課題、コンセプト案への出された意見について発表及び共有をした。

#### d) 振り返り

10月26日では、アンケートと進行について振り返りを実施した。小中学校WSの報告で印象に残ったことの項目では、「夢のような話で楽しかった」や「子どもたちの発想が自由で面白かった」のように前向きな意見が大部分を占めた。次に、進行について述べる。全体を通して、進行は問題なく進み、一定の成果物を得ることが出来た。一方でY氏から「コンセプト（仮案）が意見を出すにあたってのベースになっているか」や大学から「方針とコンセプトがつながっているかをワークに含むのはどうか」といったコンセプト案と方針、課題を合わせて議論がなされたかに対して懐疑的な意見が出された。これを受けてWS4で、基本コンセプト案と方針の結びつきを事務局から示すこととなった。

### (4) 第4回地区WSに係る協議の過程

#### a) 事前協議

10月26日では、Y氏は、前回ワーク結果の分析方法として、参加者からの課題意見を「整備に関するもの」と「運用に関するもの」に分けることを提案した。また、前回ワーク結果を基にコンセプトの決定及び各公園の方針を設定し、平面図やパースで大まかな配置を示した各公園整備案の作成を提案した。これらに対して大学と市はY氏の課題、方針意見の仕分けが重要であることに同意したうえで、「整備に関するもの」と「運用に関するもの」の項目に加えてさらなる検討が必要とした。一方で各公園整備案作成については、市が「国土交通省に提出する書類に対応するように、各公園の整備方針・配置図程度を盛り込むことを望む」とした。

11月1日では、ワーク内容を検討した。ワーク1では、整備案のたたき台に対する意見だしをすることとなった。公園ごとの整備案たたき台が記入された模造紙に参加者を取り囲むように配置し、参加者が意見を出しやすい環境をつくる。ワーク2では、ファシリテーターが公園ごとの意見をA.即着手、B.令和5年度に着手、C.将来的に着手に仕分けることとなった。ワーク3では、コンセプトと方針の結びつきの確認をすることとなった。

11月29日では、再度、ワーク内容について検討を実

施した。大学から「ワーク2において、各公園のファシリテーターによる意見の仕分けはどのような基準を用いて行うのか。意見の仕分けは責任が重すぎるのではないか」とファシリテーターへの負担を案ずる意見が出された。これを受けて、ファシリテーターが仕分けを担当し、仕分け法はシールの色を変えることとするべきではないか」とした。

#### b) シミュレーション

11月1日では、ワークにおける意見の仕分け方を検討した。Y氏・大学から課題整理について仮案が出された。これについて市・大学の「2つの仮案では、方針と統括コンセプトについて議論が出来ていない。このことから、方針とコンセプトが今一度結びついていないかを問う場が必要である」とした。仕分けの項目についてはさらなる検討が必要となった。

11月14日では、方針と平面図が掲載された整備案のたたき台と方針とコンセプトの対応表を用いて実施した。市は「ワーク用模造紙上の記載内容について、整備項目を色で分けているが、黒に統一すべき」と「整備項目は、ハードに関するものが多数を占めている。地域づくりに関わる整備項目に変更すべき」とし、整備項目は方針と対応を修正したうえで、再度、シミュレーションをすることとなった。

11月24日では、の修正された方針と平面図が掲載された整備案のたたき台（山の木、秋寄、横尾）を用いて実施した。ワーク1では、「ワーク説明の15分間で各ワークの説明に加えて、このワークが全体の流れのどこに位置するのかを説明するべき」「整備項目に対して意見をすることは難しくないか」と「遊具は改装」などの代替案を示す意見や「これは必要ないのではないか」など様々な意見が散見された。ワーク2では「枚数を少なくすることで、参加者の整備に対する真の重要度を図りやすくなるため、2枚ずつとし、1公園当たり1枚ずつとすべき」などが出された。ワーク3では、「WS-5までの間に、提示した整備項目と代替案を示す意見を時間軸と整備計画に載せやすいか否かの2軸で分析を実施するべき」とした。シールによる仕分けは、提示された整備項目と代替案を示す意見を対象とする。シールの仕分け項目を「今回の整備計画に載せる（短期）赤」、「将来的な検討とする（中・長期）青」とすることなどが決定し再度たたき台を作成することとなった。

#### c) WS

これまでWSはグループワークを実施してきたが、今回は個人ワークとした。ワーク1では、各公園の整備案たたき台について参加者がよく知っている公園を選び、提示された整備項目に対して代替案を示す意見や疑問に関する意見などを出した。ワーク2では、意見や参加者からの意見に対して整備計画案に載せるかどうかをシー

滑石3丁目下の公園

課題 コンセプト	9公園の各公園の整備 等からの重要課題を 選んで公園の改善	4つの コンセプト	1.多世代で使える、 楽しみ、遊べる公園 2.地域で使われる、 育える、安心・安全 な公園 3.自然の魅力を 残しつつ遊べる公園 4.快適しやすい、 自然にも対応する 公園	種類
課題	- 遊具を撤去し眺望 を重視	方針	遊べる公園 育える公園 自然の魅力を 残しつつ遊べる公園 快適しやすい公園	種類

公園施設と設備の解説、移設などに関する意見

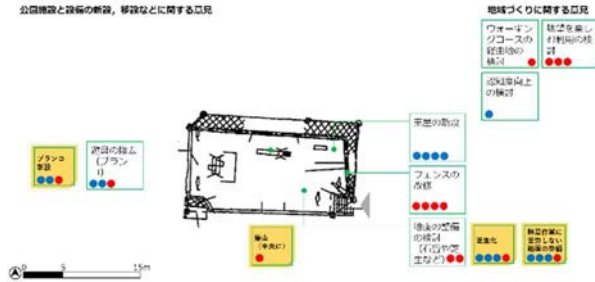


図4 滑石3丁目下の公園ワーク結果

ルを用いて仕分けしてもらった。ワーク3では、コンセプト案と方針及び方針と整備項目が対応しているかの確認をおこなった。結果として、概ね提示した方針がコンセプトと対応していることが確認された。また、滑石3丁目下の「遊具を撤去し眺望に特化すべき」(図4)といった詳細な整備に関する意見も確認された。山の木・上横尾の「トイレの改修をすべき」や横尾の「防火水槽の地中化」といった要望意見も見られた。

#### d) 振り返り

12月19日では、アンケートと進行について振り返りをした。まず、アンケートの来年度も公園中心としたテーマで定期的に話しあう場を持つこと項目では、24件の得られた回答の内「持ちたい」は15件確認された。意見として、「公園のリニューアルは必要であり、住民利用の充実のためにも話し合いは必要」や「地域のつながり、連携強化のため公園でどんな活動ができるか」「言いたいことが言えた」「知らない公園を知ることができた」などの多数の意見が出された。各公園の議論内容については、猿田と上横尾の「どちらかの公園に駐車場が必要である」や山の木「この公園の魅力をほかの地域に発信できるようにするべき」といった意見が出された。また、Y氏は「全体を通して公園に対する意見に対して、参加者の全体を見渡す力が薄まったと感じた」とし、パース作成では、事務局側が9公園全体の役割を俯瞰し調整することが確認された。また、市からは「上位概念を新たに検討するよりも、来年度、地域住民間でどのように維持管理していくかを決めるかが重要」とし、整備後の維持管理について話し合う重要性を述べた。

### (5) 第5回地区WSに係る協議の過程

#### a) 事前協議

12月19日では、WS不参加者からの意見収集及びワーク内容の検討について議論した。市から「PTA会長に今回の成果物を見せたいので、その成果物に意見を記入してもらおうのはどうか。または、アンケートを作成して、意見を伺うべきか」などの意見がだされた。次に、ワー

ク内容の検討では、主にパース作成について議論がなされた。これについて、大学からは「どのように今回出された意見をパースに反映させるべきか。パースを作るための整備項目を抽出する条件を検討すべき」とし、整備項目の抽出について検討することの重要性を示した。

12月27日では、WSまでの動きの確認と、整備項目仕分けのたたき台の検討を実施した。整備項目仕分けのたたき台の検討では、Y氏は「赤、青シールの枚数の多少で、整備項目を採用するべきではない。シールの枚数の多少は判断基準の一部とするべき」とした。これを受け、シールの枚数の多少、既存の整備項目と新しく出された意見の重要度を加味し整備項目を選定することとなった。

2023年1月12日では、整備項目の精査及び、パース記入のためのアングルの検討について議論した。各公園の議論について、大学の「猿田は河川にも整備を施していることから、地域づくりに関する意見の「蛍の生息環境づくりの検討」も採用するべきでは」とや市の「山の木は東屋を移設または撤去して、遊具とボール遊びの用途に分断された空間を一つにするべき」とした。また、市から「できるだけトイレ設備を削減したい」や「防火水槽は長期的に検討する」など費用面に配慮した意見も確認された。これに対し、大学は「トイレ設備などは地区全体を見渡して検討すべき」とし地区全体を見渡すことができる全体マップの作成を提案した。

2月1日では、PTAからの意見収集の結果の共有と各公園のパース作成の進捗について議論した。Y氏からは「設備の運営や維持管理方法が課題となり、意見が出されないケースがあった。WS-5で地域づくりに関する課題についてのワークを実施するべき」とや大学の「WS-5までで完結するのではなく、今後も自治会と管理の仕組みについて話し合う場を設けるべきであり、自治会に来年度以降の動きについても共有するべき」とした。以上より、地域づくりのワークも組み入れることとなった。

2月15日では各公園のパース、全体マップ作成の進捗及びWSの実施要項の確認を実施した。猿田について機構の「現実的な整備案では河川の整備を中心として検討するべきではないか」とや大学の「理想的を将来的に変更、現実的な整備については他の整備案と同等にすべき」などの意見が出された。築廻についてY氏は「幼児用遊具を斜面遊具の下段の部分に配置するべき」とした。全体マップに関する意見では、Y氏の「公園が相互補完していることや、秋葉がハブであること等を示すべき」などが挙げられた。以上を踏まえて再度パースと全体マップを修正することとなった(図5, 図6)。次に、Y氏より、WSの実施要項の素案が出された。これについて、大学の「前半のワークの形式を回遊型、後半をグループ型にするのはどうか」とやY氏の「予め地域づくりに関する課



図5 全体マップ



写真2 再整備前の風景 (築廻)

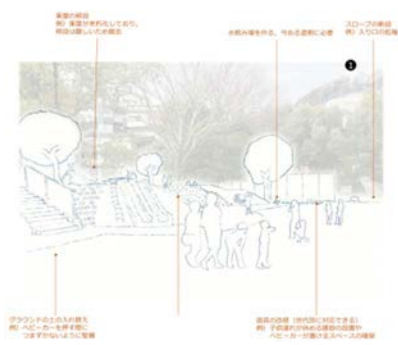


図6 パース (築廻)

題の意見出しについては、「地域住民に伝えるべき」などが挙げられた。以上を踏まえ、前段で整備計画のパス図を用いた説明、やワーク時間の拡大などを同意した。

なお、図5は各公園のコンセプトと公園の役割の視覚化、各公園間の関係性をベースマップに全体が俯瞰できるように図化したものであり、加えて図6は今回の再整備で主に変わる箇所の風景を捉えた写真(写真2)を基に、具体的に変わる整備案をパスとして表現したものである。

### b) シミュレーション

2月22日では、WSの流れ及び各整備計画とパースの確認を実施した。まず、WSの流れを確認した。これについて、大学・市の「パースの整備項目の内容を説明するのではなく、整備計画からパースに落とし込んだ過程やパースの見方などについて説明するべき」やY氏の「全体マップの見方を説明してほしい」が挙げられた。次にワーク1については、市の「今までの議論がわかる整備計画を採用するべき」や「グループファシリテーター用の各公園の整備項目のまとめを用意しておくべき」が挙げられた。次にワーク2では、Y氏の「意見はすでに記入されている課題に対するものや新たに検討したい課題に関するものなどを想定している」などが挙げられた。以上を踏まえて、ワークでは、全体マップ・パースの見方、整備計画からパースに落とし込んだ過程について説明すること等を確認した。

### c) WS

前回の結果を基に、ファシリテーターと大学から各公園の役割のつながりを示した全体マップ、整備計画案、パースが提示された。ワーク1では、参加者が知っている公園を選び、全体マップを基にパースや整備内容につ

いて意見出しを実施した。その後、主に話し合われた意見について発表・共有した。ワーク2では、各公園の整備された後の使い方などの地域づくりに関する課題について意見を出し合い、発表・共有した。ワーク1で出された意見では、上段に芝を植えてほしい(築廻)、フェンスの改修について住民意見を踏まえて考えるべき(滑石3丁目中)、草刈りの負担を減らしたい(横尾元村)などが確認された。ワーク2で出された意見では、ホテルの生息環境づくりを地域全体で支援する(猿田)、草木の鑑賞より球技等ができる場所が欲しい(山の木)、昆虫採取学習を実施(上横尾)などが把握された。

## 5. 総合的考察

### (1) WSを開催するうえでの緻密な準備の必要性

11月の事前協議にて、Y氏から「ワーク毎の冒頭にて内容を説明するべき」や、8月のシミュレーションにて、大学から「ワークとワークの間にコンセプト案を作成することの意味を参加者に共有することで、参加者のワーク内容への理解が深まる」とした意見が挙げられた。また、地区WS-1にて、大学が各WS後に開催及び内容を報告する文書の配布の必要性を訴えた。他方、地区WS-4のアンケートでは、地域住民から「知らない公園を知ることが出来た」や「言いたいことが言えた」等の意見が出された。これらは、各WSの成果を最大限に引き出すことを目指し、事務局が事前協議、シミュレーション、WS、振り返りの一連の流れを継続したことが有効であったことの証左と考えられる。

地区WS-2, 3に係る協議では、プログラムに則し1回

ずつのシミュレーションを、地区 WS4 に係る協議では整備案たたき台の見せ方や参加者との受け答えなどの複数のシミュレーションを実施した。これは、8月のシミュレーションにおいて参加者役から「設問が難解」や「回答方法が不明」とした意見が出されたことを契機としている。これを機に、地区 WS-1, 2では現況把握やコンセプト検討に関する意見出しであったものが、地区 WS-3 以降では整備案のたたき台への意見出しに変更するなどの工夫が検討されたためと考えられる。加えて、事務局がシミュレーションの回数を予め決めず局面ごとの状況に合わせて増やした工夫も重要である。すなわち、事務局の想定と参加者の回答範囲に差異が生じていたことの確認を潮目に、事務局のワークにおける理解しやすい設問づくりや必要に応じたシミュレーションの調整など参加者の目線に立った細かな議論が展開されたためと推察する。

## (2) 公園づくりに対する参加者の意識変容

当初、地区 WS や協議は 2022 年度限りであったものの、地区 WS-2 振り返りにおいて、大学から来年度以降に協議の場を持つことの重要性が示され、継続的に実施することを事務局間で合意した。これを受け、地区 WS-4 の事後アンケートに来年度以降の検討に関する設問を組み込んだ。事後アンケートの「来年度以降も公園を中

心としたテーマで定期的に話し合う場を持つこと」について、半数以上の地域住民が「持ちたい」と回答した。具体的には「地域連携強化のため、公園でどんな活動ができるのか」「地域内外の交流の促進」等の回答が挙げられた。加えて、事務局は 12 月の事前協議にて、整備後の維持管理や利用法に関する自治会長との協議の必要性を議論した。これらは、事務局が整備された直後の公園利用だけでなく、整備されて 10~30 年後の長期的な公園利用も考慮したことに起因している。事務局が地域住民に対し、維持管理等の地域づくりの課題の議論を来年度以降も継続して展開することを促したことで、地域住民間で積極的に公園づくりについて検討する意識が醸成されたものと推察する。

## (3) 公園全体に関する議論の工夫の重要性

図 7 は WS 内容や手法などにおける回ごとの変化を表したものである。地区 WS-3 では地元自治会から「地区の公園全体を意識して議論してほしい」と要望が出された。また、地区 WS-2 では、地域住民から「各公園の役割を連動させるべき」などの意見が多数把握された。その結果、地区 WS-2, 3の一部のワークに加え、地区 WS-4 においても公園全体の議論に関わるコンセプトの検討を中心としたワークを実施するに至った。これらは、初期の事前協議にて、事務局間で成果物完成までの段取り

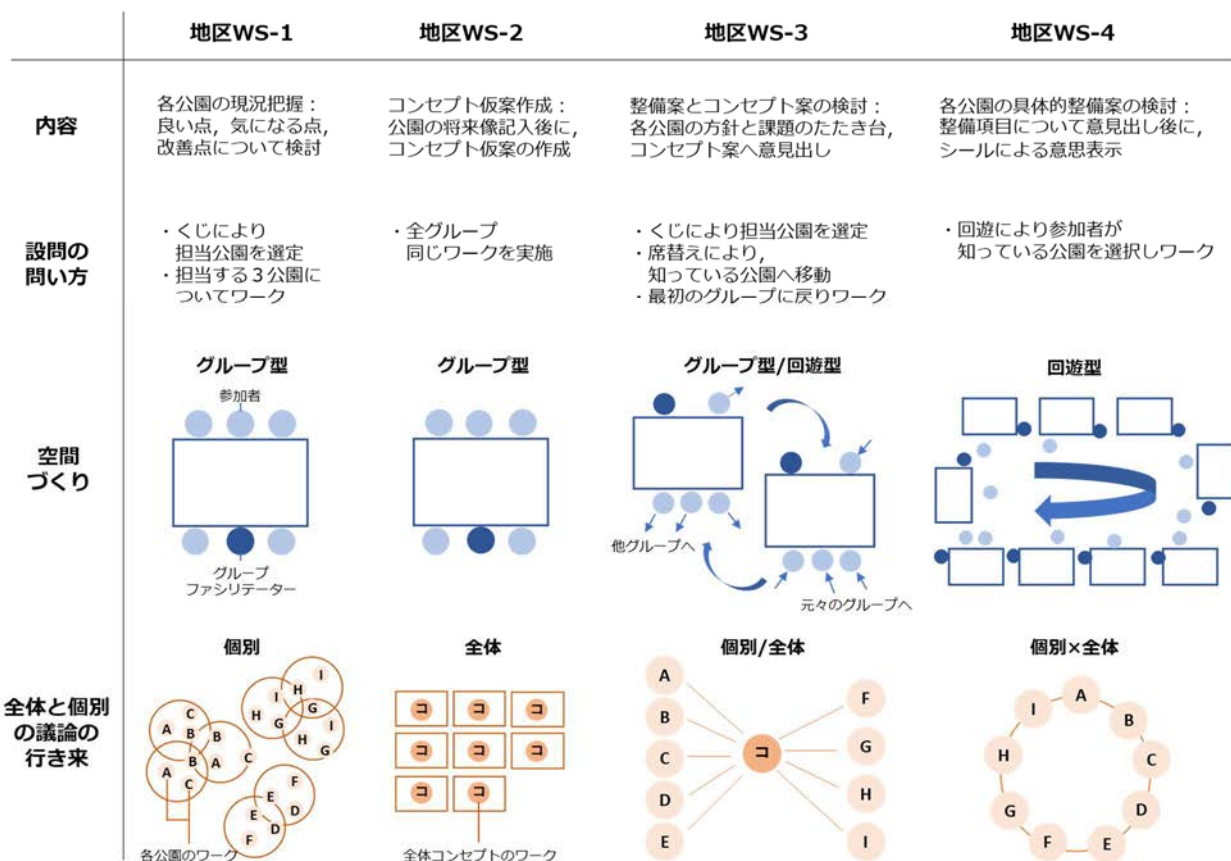


図 7 内容や設問の問い方などの WS ごとの変化

を先行して検討することを共有し、大まかな指針を設定したことで、指針設定において、多少の変化は見られたものの、地区の公園全体の議論に重きを置くことに一貫したことが一因として考えられる。加えて、これらは、本事業を計画するうえで、当初より事務局が各公園の整備の議論よりも地区の公園全体を意識した議論に重きを置いたことも一因であると考えられる。また、これらの議論を地域住民の言動やアンケート結果を考慮し、適切なタイミングで実施できたことも重要である。上記の取り組みが地域住民にとって、地区の公園全体を意識して検討することへの意欲を促したものと解されよう。

他方で、地区 WS-1 では横尾元村など3公園に関する意見は「知らない」「わからない」の2~3件であったが、地区 WS-4 では「滑石3丁目下の公園は遊具を撤去し眺望に特化すべき」などの具体的意見が複数確認された。これらは図7のように、各WSの内容に合わせて、事務局が意見の出し方や参加者が担当する公園の選定方法、グループファシリテーターと参加者の配置、各々の公園と地区全体の議論の関わり方を変化させたことの成果といえる。すなわち、設問の問い方、空間づくり、全体と個別の議論の行き来を、WSごとに調整したことで、地域住民の公園に対する理解度の向上及び、積極的参加に寄与したと推察する。

#### (4) 一体的検討による各役割の把握のしやすさ

地区 WS-4 において、地域住民から、公園の遊具を最低限残しつつ適切な空間利用の選択を希望する意見や、各公園の連携強化を求める意見などが出された。このことから、事務局と地域住民間で、9公園の使われ方の頻度や認知度の差を捉え、各々を全て同じように整備するのではなく、各々に適した整備案を検討するに至った。これらは、事務局が現地調査の結果や各WSに向けた協議にて、使われていない公園を短絡的に未整備、廃止とせず、各公園の役割が連動する整備案を検討し続けたことが一因として挙げられよう。これらは、地域住民にとっての公園の価値を高め、各々の機能を特化・相互補完することに寄与することを示唆している。加えて、従来の個別の公園に着目した再整備に比べ、経済的な効率性の向上に寄与することも指摘したい。

他方、地区 WS-4 の「山の木、上横尾緑地のトイレの改修」や「横尾公園の防火水槽の地中化」などの要望意見が確認された。しかし、1月の協議では、市から「トイレの削減」や「防火水槽の検討の長期化」といった維持管理・費用面の指摘が出され、事務局は各公園の設備

の必要性の検討や現実的整備案と理想とする案を表したパースの作成などを試行した。これは、大学の「トイレ設備などは地区全体を見渡して検討するべき」との意見を受け、公園から他の公園までの時間や、遊具の対象年齢、駐車場の有無などを載せた全体マップを作成し、事務局間で公園が及ぼし合う影響を検討したことが要因である。すなわち、複数公園を一体的に検討するうえでは、全体を見渡すことができるマップの作成が地域住民と公園を管理する自治体が納得できるような試作案の作成に寄与し、各公園の整備案作成の一助となることを重ねて指摘したい。

#### NOTES

- 注1) 国土交通省『都市公園緑地・景観課都市公園のストック効果向上に向けた手引き』2016
- 注2) 厚生労働省『日本の人口の推移』2012
- 注3) 北九州市建設局公園緑地部みどり・公園整備課『地域に役立つ公園づくりについて』2021
- 注4) 国土交通省『新たなステージに向けた緑とオープンスペース政策の展開について』2016
- 注5) 国土交通省『社会資本整備総合交付金交付要綱』2016
- 注6) 長崎市『住民基本台帳に基づく町別人口・世帯数(各月末)』<https://www.city.nagasaki.lg.jp/syokai/750000/752000/p023436.html> (令和5年2月3日確認済み)

#### REFERENCES

- 1) 萩尾愛子, 柴田久, 石橋知也, 河原有佑, 井町直人, 奥村瑛太郎: 対馬市厳原における歴史的石塀保全を目指した街路再整備事業に関する考察, 土木学会論文誌 D1, Vol.71, No.1, pp.56-70, 2015
- 2) 柴田久, 石橋知也, 松尾健史: 福教大付属福岡小学校における児童参加の広場デザイン, 景観・デザイン研究論文誌(3), pp.7-17, 2007
- 3) 三宅諭, 大瀧英知: 岩手県野田村の復興むらづくりにおける小中高参加による都市公園事業の総括, 日本都市計画学会, 都市計画論文集, Vol. 53, No.3, pp.445-452, 2018
- 4) 吉田俊介, 矢口哲也: 小公園の機能分担における多基準評価と整備の意思決定支援モデルの構築, 東京都足立区パークイノベーション推進計画を事例として, 日本建築学会計画系論文集, 第85巻, 776号, pp.2171-2181, 2020
- 5) 小林里菜子, 坂井文: 札幌市における都市公園再整備の変遷に関する研究, 大通公園, 中島公園, 美香保公園の再整備を事例として, 日本都市計画学会, 都市計画論文集, No.43-3, pp.583-588, 2008
- 6) 小玉知慶, 柳井重人, 中尾優花: 首都圏近郊都市における街区公園と未利用地活用型オープンスペースとの利用の相違, ランドスケープ研究, Vol.84, No.5, pp.627-632, 2021